

(別添 4)

【豊明市】

1人1台端末の利活用に係る計画

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものが劇的に変わる状況が生じつつある。このように急激に変化する時代の中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

そのような背景から、新学習指導要領では「個に応じた指導」を一層重視する必要があるとされている。「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように、探究的な学習や体験活動などを通じ、多様な他者との「協働的な学び」を充実することも重要とされている。

その学びの要となるのが一人一台端末である。ICTの活用により、子ども一人一人が個別のペースを大切にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、「協働的な学び」にも発展させることができる。

また、豊明市は「協同の学び」を推進している。授業において望ましい他者との人間関係を築き、子どもの学びへの無関心・学びからの逃避をなくし、すべての子どもの学びを保障する学校を目指している。ICTを活用しながら「個別最適な学び」の時間を確保し、かつ多様な他者との「協働的な学び」を進めることで「協同の学び」の実現を目指していきたい。

特別支援教育においては、児童生徒の障害の状態に応じて、その可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加に必要な力を培うため、一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う必要がある。ICTを活用することで、教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりしたい。また、障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために、ICTを活用していきたい。

さらに、豊明市では外国にルーツをもつ市民がたくさん生活をしており、総人口に占める割合は約4%で県内でも高い割合となっている。学校においても多文化共生が求められている。外国にルーツを持つ児童生徒にとってもICTを活用した翻訳や音声での聞き取りが可能になるなど、他者と協働的に活動をするうえでICTは欠かせない。多文化共生を意識した学びの実現を進めたい。

2. GIGA第1期の総括

令和5年度までの端末の整備や通信ネットワークの整備やこれらを活用した学びの実践では以下のような課題が明らかになった。

【低学年】 デジタルドリルや動画の再生など、「個別最適な学び」としてのICT活用を中心に進んでいる。ICTを活用した「協働的な学び」の低学年児童の在り方についても検討していく必要がある。

【中学年】 ローマ字入力ができるようになる段階であり、低学年に比べて共同作業をするなど、「協働的な学び」の活用は広まってはいる。しかし、手書きの字や

絵、あるいは直接的な対話のようにアナログを大切にする必要もある。ICTとアナログのハイブリッドでの活用の在り方を検討していく必要がある。

【高学年】 タイピングができる児童やスライド編集等、文字や画像を編集することをスムーズに行える児童生徒が増えた。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けてよい方向で進んでいる。しかしながら、活動中心的になることにより「何を学んだか」「何を教えたか」が曖昧になる授業も増えている。

【中学生】 定期テストに向けての授業を意識するあまり、「何を教えたか」「何を学んだか」を重視し、生徒を評価してしまっている授業が多い傾向にある。ICTを活用した「協働的な学び」が停滞している授業も少なくない。個別の活動におけるデータをポートフォリオ的に記録し、積み重ねた上での評価や、個別の活動を基にした協働的な学びをいかに進めていくかが課題である。

【全 体】 全国学力・学習状況調査（学校質問）では、ICT機器の使用程度が小学校「ほぼ毎日」が50.0%、「週3回以上」が37.5%と全国平均を下回った。しかし、中学校では「ほぼ毎日」が100%と全国平均を上回った。これは、プロジェクター型電子黒板が全中学校に設置されていることが大きな要因と考えられる。設置されていない小学校では、アウトプットがしにくいために、アナログ的な授業や学びが多くなっていることが課題である。令和7年度以降、市内全小学校にもプロジェクター型電子黒板を設置することで、さらなるICT活用の推進を図っていきたい。

3. 1人1台端末の利活用方策

1、2に記したように豊明市では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を図りながら、子どもたち同士がつながり合う「協同の学び」を進めていく。一人一台端末環境を引き続き維持し、「協同の学び」としてのタブレット端末の利活用を促していく。ICTの利活用方策としては以下の通りを考えている。

【ICT研修の充実】

- ・ ICT推進委員会を中心として、Google Workspace for Educationの活用を中心として、夏季休業中に教員向けの研修を行う。

【ICT支援員配置】

- ・ ICT支援員の市内の小中学校への巡回を引き続き行う。授業における活用の仕方についての支援を行うことで、さらなるICTの活用の推進を図る。

【一人一台端末積極的活用】

- ・ 個別最適な学び：単元を見通して、自分で調べたり、学習を進めたりする場面の設定を意識させる。また、デジタルドリルの活用をさらに促す。
- ・ 協働的な学び：自分の考えをまとめ、発表や表現、共有する場の設定を意識させる。子どもたち同士がICT活用して他者参照をしたり、交わったりする場を設ける。

タブレット端末の活用においては、例えば上手に話をして意見を言うことができない児童生徒もアウトプットの間が確保される点は大変なメリットである。アウトプットされた意見等を共有する場があると、他者参照しながら、自分の意見をブラッシュアップすることにもつながる。子どもたち同士や教職員がつながる要としてのタブレット端末の利活用を進めていきたい。